

アメリカで子供を育てるということ

是澤 麻子

助産婦(米国・南カリフォルニア・サンディエゴ在住)

私は助産婦として大阪の聖バルナバ病院で3年程勤務した後、結婚して上京、1年余り助産婦として働きました。長男の出産を機に退職し、その後さらに1男1女に恵まれ、現在は8歳(男)を頭に6歳(男)、4歳(女)の3人の子供と主人とで、アメリカで生活をしています。

最初のプレスクール:日本人集団

主人の転勤で、3人の子供を連れてアメリカ・南カリフォルニアのサンディエゴにやってきたのは、今から4年前の夏のことでした。当時、長男4歳、次男2歳、長女2か月。アメリカに住めば、子供はすぐに英語を覚えてなじんでいくと軽く考えていた私は、早速プレスクール(保育園)を探し、長男と次男を週5日、午前中に通わせました。そこは家から車で10分程の距離で、20人ほどのクラスに日本人の子供も5~6人混じっており、アメリカ人しかいないスクールよりも何かと安心と思って選んだのです。通園を始めると、やはり、まずは日本人の子供と一緒に遊ぶことでクラスに参加し始めた様子でした。

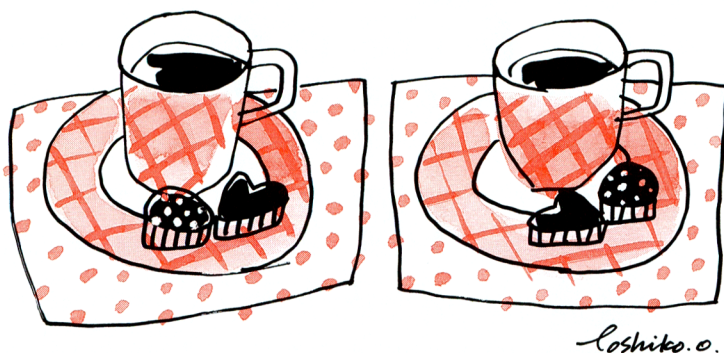
ところが、1か月経っても2か月経っても、遊ぶときはいつも日本人の輪の中で、アメリカ人の子供との交流が全く見られないのです。たまたま長男がアメリカ人の子供と遊ぶ気配を見せると、日本人の子供のグループから仲間はずれにされたり、スクールの休み時間に英語を少し話すと、他の日本人の子供に「その英語、変」とからかわれて萎縮してしまう、といった状態で、長男はだんだんストレスが高じていきました。

日本人園児の母親のほうも、英語の不自由な人が多いこともあって、日本人ばかりで固まって行動するグループができていました。朝スクールに子供を送った後、そのまま日本人の母親だけでお茶を飲みに行ったり、ショッピングに行ったりと集団で移動し、午後のスクール終了時間に皆で子供を迎えに行きます。その後は子供も加わって、「今日は〇〇さんのお宅」と集合、夕方遅くまで一緒に過ごす毎日です。スクール以外の習い事も、日本人同士で相談して同じ所に行き、時間を合わせる徹底ぶりです。その歩調を少しでも乱すと、親も子も仲間はずれにされるという雰囲気でした。結局、これではいつまでたっても自分も子供も現地のコミュニティに溶け込めず、生活を楽しめないと感じ、主人とも相談して半年が過ぎた時点でプレスクールを変える決断をしました。

スポーツ教室

これに懲りて、それ以降は日本人の少ないスクールや環境を選ぶようになりました。長男はアメリカ人ばかりのプレスクールに移り、最初は友達もあまりできませんでした。それでも一緒に遊ばせようと誘ってくださるアメリカ人の親御さんもいて、だんだんと友達が増え、クラスの輪に溶け込むようになりました。

また、放課後を利用してスケート、体操、水泳、ギターなど、子供が興味を示すことはできるだけ挑戦させました(極力日本人がいない時間帯と場所を選んで)。これはいろいろな意味で大変有意義でした。アメリカ人の友達がたくさんで



Loshiko.o.

き、練習して上達する喜びを覚え、自分に自信がついて、何事にも積極的になりました。

現在も、長男・次男は週3回アイスホッケーのチームでプレーし、長女もスケートの初歩レッスン中、そして3人とも大の水泳好きで、ほぼ1年中スイミングスクールにも通っています。こうした活動を通じて子供ばかりでなく、私や主人も、コーチの人たちと知り合いになり、アメリカ人の公共心、躰の厳しき、スポーツを楽しむ姿勢など、いろいろ学ぶ機会に恵まれました。また、子供が出場する各種スポーツ大会を通じて楽しい思い出がたくさんでき、こちらでの生活をエンジョイする大きな柱になっています。

アメリカの小学校

長男6歳の秋、アメリカの公立小学校に入り、その日本との違いに驚かされました。まず初日、入学式もなく、いきなり授業が始まり、終業は午後3時。筆記用具など必要なものはすべて学校で用意されていて、授業の時に皆で使います。教科書もなく、学校図書の本を使って授業を受けたり、コピーやプリントを使って宿題が出ます。

同じ学年は3クラス(1クラス18人前後)あり、授業の進め方は各担任教師に一任されているようで、それぞれ全く違う教材を使って授業を進めていきます。その一方、学校における校長先生の権限は絶大で、担任の先生のやり方にどうしても不満がある場合、校長先生に相談してクラスを変えてもらうことも、こちらでは珍しいことではあり

ません。学校の教育方針を説明される機会も多く、親はいつでも学校に行って教室を見学することができ、予約さえすれば先生は必ず時間を取って会ってくれます。こちらでは公立の学校であっても「“良い教育”というサービスを提供する」という考え方で教師は親に接している、と感じます。

また、親の子供の教育への参加やボランティアも、当然のように求められます。私も午前中のあいた時間で、長男と次男のクラスのボランティアを始めました。「英語が不自由だけど、できるかな」と先生に聞くと、「No Problem!」と言ってどっさりプリントの丸つけやコピー取り、鉛筆削りなどの仕事をもらうようになりました。今も教室の後ろでそうした雑用をこなしています。私としても週1回は子供の学校生活が観察でき、その半日は学校で使う英語が耳に入ってきて、これが役に立つことが多く、大変有意義です。最近は算数などができない子供に教えるのを手伝われ、時々冷や汗をかきます。

アメリカに来て4年と4か月が経ちました。今は、私も子供もこちらでの生活を忙しく楽しんでいます。1～2年以内に主人の赴任期間が終わって帰国します。その時に子供の受けるカルチャーショックを思うと、頭が痛くなります。今は労働ビザがないので私も働けませんが、帰国したら、助産婦として職場に復帰することを真剣に考えるかも知れません。その時に今の経験が生きるかどうか、まだ想像もつかないというのが本音です。

次は聖バルナバ病院の坂真由美さんです。